

國學院大學學術情報リポジトリ

二 変化する災後の地域において宗教が担う持続性

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒崎, 浩行 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001080

二 変化する災後の地域において宗教が担う持続性

黒崎 浩行

はじめに

この章では、東日本大震災の発生から六〇八年が経った二〇一七（平成二十九）年から二〇一九（平成三十一・令和元）年にかけての、岩手県・宮城県における祭礼と宗教施設・宗教空間をとりあげ、災害からの復興過程にある地域において宗教がどのような役割を担っているかを考察する。

この問いをめぐっては、阪神淡路大震災の被災地域やその他の地域に関して三木英らの業績があり、また、変化する被災地域における祭礼・芸能の継続がもつ意義に関しては植田今日子〔二〇一六〕、橋本裕之〔二〇一五〕、滝澤克彦〔二〇一三〕、稲澤努〔二〇一八〕らの調査研究がある。東日本大震災の発生から二年後に刊行した「稲場・黒崎編二〇一三」や、東日本大震災の発生から二〇一六年までの期間における福島県いわき市を中心とする浜通り地方の地域コミュニティ再生における宗教の役割を実証的な調査研究によって解明した「星野・弓山編二〇一九」のような業績も出ている。筆者も、この期間にさまざまな共同研究に関わりつつ神社・祭礼を中心として諸報告・考察を重ねてきた「黒崎二〇一九」。

ここでは、災害発生から六〇八年という期間における被災地域の次のような変化が念頭にある。まず、土地区画整理、復興まちづくり、災害公営住宅への入居が進み、応急仮設住宅が解体されていった。三陸沿岸道路をはじめとす

る交通インフラが整備され、広域的な流通や交流人口の拡大が期待される一方で、二〇一五年十月に行われた国勢調査によって明らかになったように、被災地域の人口減少が加速している。政府は二〇一六年から二〇二〇年までを「復興・創生期間」と位置づけていたが、この間に積み残された、あるいは新たに生じてきた問題に対応するために、二〇一九（令和元）年十二月二十日に「復興・創生期間」後における東日本大震災からの復興の基本方針」を閣議決定し、復興庁を二〇二二年以降さらに十年間存続することを決定するに至っている。

本章では三つの事例に注目しつつ考察を進めていく。

一つは、岩手県陸前高田市において被災後も継続してきた八月七日の行事、「うごく七夕」・「けんか七夕」（二〇一九年八月調査）である。被災後に持続した祭礼に関しては、この他に、宮城県山元町の八重垣神社例祭（二〇一七年七月調査）、宮城県気仙沼市本吉町の小泉八幡神社例祭（二〇一八年九月調査）、宮城県石巻市雄勝町の葉山神社亥年御開扉大祭（二〇一九年五月調査）、宮城県東松島市宮戸月浜のえんずのわり（二〇二〇年一月調査）などについても現地訪問調査を行っており、共通点もかいま見えるが、別稿に譲りたい。

次に、三陸沿岸の自然環境保護と交流人口の拡大に寄与する官民連携の取り組みにおける宗教空間の存在について触れる。具体的には、環境省の事業「みちのく潮風トレイル」において探索・整備の対象とされた道の中に、その地域の宗教文化に関わりの深いものがみられる（二〇一八年九月調査）。その意義と可能性を考える。

最後に、津波によって流失した碑が後に発見され、神社境内に安置された事例（二〇一八年九月、二〇二〇年一月調査）を取り上げる。

復興過程の中で持続する祭礼―陸前高田市「うごく七夕」・「けんか七夕」の事例から―

「うごく七夕」・「けんか七夕」は岩手県陸前高田市の夏祭りで、毎年八月七日に行われてきた。地区ごとに七夕飾りをつけた山車を曳いて練り歩く。山車の中には複数の太鼓が据え付けられており、若者・子どもが中に入って太鼓を打ち鳴らし、笛を吹く。高田町の「うごく七夕」に対し、気仙町の「けんか七夕」は、梶棒を山車どうしでぶつけあう「けんか」が見物になってきた。

東日本大震災により陸前高田市では人口の七・二%におよぶ一七五七人が犠牲となり、中心市街地は津波によって壊滅的な被害を受けた。市は、「災害に強い安全なまちづくり」を掲げ、住宅地の高台・後背地への移転と、大規模な土地のかさ上げによる中心市街地の整備を進めていった。

そうした中で、「うごく七夕」・「けんか七夕」は、地域住民と地域外から訪れる一五〇〜二〇〇人のボランティアによって継続されてきた。「けんか七夕」は、祭礼の中心地である気仙町今泉地区が壊滅的な被害を受け、コミュニティの結束が危ぶまれる中で、一基の山車で復活をとげた様子が池谷薫監督のドキュメンタリー映画『先祖になる』（二〇一二年）に記録されている。翌年の二〇一二年から山車は二基となり、かさ上げ工事の影響に



「うごく七夕」(左)と「けんか七夕」(右) (2019年8月7日撮影)

より毎年少しづつコースの変更を余儀なくされつつも、この二基で「けんか七夕」は続いている。

二〇一九年八月七日の「けんか七夕」では、被災前であった「鉄砲町」の跡地に道路が通じ、鉄砲町の元住民を中心に山車を曳いていく様子が見られた。また、山車の名前も、二〇一二年以来、「今泉組」・「気仙組」となっていたが、二〇一九年より「鉄砲町」・「八日町」に改められた。被災前は「八日町」は「上八日町」と「下八日町」に分かれており、このほかに「荒町」の山車もあった。こうしたことは主催者のアナウンスで告げられ、地域外から訪れている多くのボランティアや見物者も、地域住民がそこに込めている思いを共有することができるように配慮されている。

高田町の「うごく七夕」は、二〇一七年四月に開業した複合施設「アバッセたかた」を中心とする市街地に各地区からの山車が集結するようになってきている。二〇一九年八月七日は中央・荒町・大町・和野・松原・大石・駅前組・川原・鳴石・長砂の十基の山車が集結し、練り歩いた。和野組の山車を曳いていた人によると、山車につける七夕飾りは、当日の一ヶ月半前から町内会の集会所に集まり、班に分かれて交代で作ってきたという。また、地区ごとに祭りが好きがいてリードしているという。他方で大勢のボランティアや見物者の存在も祭りの執行に欠かせない様子がある。同じ人によると、以前（東日本大震災よりも前）、週末開催に変えてみたことがあるが、予定を立てられなくて困るという声が訪問者から寄せられ、それで八月七日固定で続いているとのことである。

祭礼と宗教者との関わりについては、中心市街地での賑やかな練り歩きのさいには一見うかがえないが、各地区での山車の出発時に神主または僧侶による祈祷が行われている。「けんか七夕」では、成田山新勝寺の僧侶が狩衣を着装して神道式で祈祷を行っている。また、祭りの意味を地元住民に問うと、陸前高田市の七夕祭りは盆の先祖供養が起源であり、震災犠牲者の慰霊の意味も込められているという答えが返ってくる。



田東山行者の道（2018年9月23日撮影）

集落移転や市街地整備の影響によって祭りの執行に変化を蒙り、ボランティアの支援を必要としつつも、地域住民の被災前の暮らしや結束、あるいは先祖の記憶を継承するものとして祭礼が意義づけられていることがうかがえる。

同様の特徴は、前節で触れた他地域の祭礼にも共通して見られるところである。

三陸沿岸の自然環境をつなぐ道と宗教空間

環境省の事業「みちのく潮風トレイル」は、東日本大震災によって津波被害を受けた東北地方の太平洋沿岸部を徒歩で縦断できる道を整備し、地域の自然環境、歴史文化、食文化に触れる機会を作る官民連携の取り組みである。二〇一九（令和元）年六月九日に全コースが開通し、式典が宮城県名取市で行われた。

二〇一八年九月二十三日に、環境省の施設「南三陸・海のビクターセンター」が「みんなで歩こう！みちのく潮風トレイル in 南三陸」という企画を実施した。これは、「みちのく潮風トレイル」に指定され、整備された田東山（宮城県南三陸町歌津・宮城県気仙沼市本吉町）の登拝道、「行者の道」を、自然と歴史のガイドつきで歩くというもので、筆者を含め約十名が参加した。

田東山は、奥州藤原氏の勧請により羽黒山清水寺、田東山寂光

寺、幌羽山金峰寺が建立された山岳修験の地で、山頂付近には経塚が残っているものの、永祿年間（一五五八―一五七〇）に施設群は焼失したとされる。南三陸町歌津樋の口から入り、途中に「蜘蛛滝」・「穴滝」がある「行者の道」は、往時の登拝行を偲ばせるが、ハイキングコースとしても親しまれてきたという。また、東日本大震災の災害救援ボランティアとして歌津を訪れた八幡明彦氏（二〇一四年五月没）は「蜘蛛仙人」と名乗って樋の口付近に移り住み、自然学校「歌津てんぐのヤマ学校」を主宰して、津波被災を経験した子どもたちが自然と向き合って生きるための知恵を授けていた「蜘蛛二〇一五」。

この企画を立てたスタッフのH氏は、三陸沿岸の自然環境と宗教文化との結びつきに関心を寄せており、こうした「信仰の道」に多くの人が気づいてほしいという。

筆者は「みちのく潮風トレイル」のごく一部しか踏査していないが、例えば、広田半島（岩手県陸前高田市）のルートには黒崎仙境があり、ここは黒崎神社の奥宮に通じる道となっている。船越半島（岩手県下閉伊郡山田町）の荒神社に至る道も「みちのく潮風トレイル」に指定されている。また、「みちのく潮風トレイル」とは別に、気仙沼観光コンベンション協会が企画している「宮城オルレ 気仙沼・唐桑コース」では、唐桑半島突端の御崎神社がコースに入っていて、唐桑半島の住民による参詣道とも重なるという。

今後、こうした道の信仰面での意義や価値が、どのような担い手によって、どのように発信されていくのかに注目したい。

復興の残余を受けとめる宗教空間

最後に、宮城県気仙沼市本吉町の小泉八幡神社の境内に安置されている「魚魂碑」について取り上げる。



小泉八幡神社境内に設置された魚魂碑
(2019年9月7日撮影)

この碑は、小泉地区鮭増殖組合の孵化場に設置されていた。小泉川（津谷川）を遡上する鮭を捕獲して腹を裂き、卵を取り出して受精させ、稚魚になるまで育てて放流するという事業がここで行われているが、捕獲された鮭の供養のために一九八五（昭和六十）年十月に魚魂碑が建立されたものである。東日本大震災の津波により流失したため、新たな碑が二〇一五（平成二十七）年十月に新たな孵化場に立てられた「小泉八幡神社二〇一九」。

ところが、二〇一七（平成二十九）年四月、小泉川の堤防工事中に、もとの魚魂碑が発見された。小泉八幡神社の総代によって参道脇に移された後、同年十月に境内の忠霊塔の脇に設置された。ちなみに、小泉川鮭増殖組合の豊漁祈願祭は、毎年九月に行われる小泉八幡神社例祭にあわせて、同神社宮司が祭主をつとめて行われてきた。その点でもゆかりの深い地に収まったことになる。

こうした事例は珍しいのではないかと考えていたが、岩手県陸前高田市でも同様の事例があった。陸前高田市の冰上神社参道に設置されている歌人・石川啄木（一八八六～一九一三）の歌碑は、もとは高田松原に設置されていたが、一九六〇年のチリ地震津波で流され、再建された後に発見されたものである（二〇二〇年一月、陸前高田市で聞き取り）。その後、二〇二一年三月十一日の津波で二代目の歌碑も流され、三代目の歌碑が二〇一三年十月に道の駅高田松原に建てられた。冰上神社参道にある初代の碑には「命なき砂のかなしさよ／さらさらと／にぎればゆびの間よりお

つ」と刻まれている。用字は揮毫者によるもので、啄木本人のものとは異なっている。

復興の過程でさまざまなものが更新されていくなかで、取りこぼされたものを受けとめる空間としての役割を宗教が果たしていると言えよう。

結び

以上、震災発生後六〇八年の被災地域における宗教に関する三つの事例を見てきた。はじめの二つの事例は、地域コミュニティの再生や、自然環境を基盤とした交流人口の拡大といった復興をめぐる課題に宗教文化が一定の役割を果たす、もしくはそれが期待されていることを示すものであった。対して、最後の事例は、復興事業が進む中でむしろ取りこぼされていく残余を実際に形あるものとして受けとめていく宗教の役割を示すものであった。前二者の事例で示したような、一見して復興を前向きに支えるような動きの中にも、こうした残余ないしは余剰を受けとめる要素が含まれていたのではないか。また、そのことが変化する地域における持続性を担保しているのではないか。それは、「けんか七夕」の山車を震災後八年目にしてようやく住民がもとの居住地に曳くことができた事実にもかいま見える。こうした点をあらためて注意深く発見、検証していく必要があるだろう。

参考文献

稲澤努 二〇一八「祭りの「復興」過程―宮城県山元町の八重垣神社の事例から」高倉浩樹・山口陸編『震災後の地域文化と被災者の民俗誌―フィールド災害人文学の構築』新泉社、八八―一〇〇。

稲場圭信・黒崎浩行編 二〇一三『震災復興と宗教』(叢書 宗教とソーシャル・キャピタル4) 明石書店。

- 植田今日子二〇一六『存続の岐路に立つむら・ダム・災害・限界集落の先に』昭和堂。
- 蜘蛛仙人二〇一五『僕が歌津にいた理由』RQ聞き書きプロジェクト。
- 黒崎浩行二〇一九『神道文化の現代的役割―地域再生・メディア・災害復興』弘文堂。
- 小泉八幡神社二〇一九『本吉町小泉 八幡神社の記録』小泉八幡神社。
- 滝澤克彦二〇一三「祭礼の持統と村落のレジリアンス―東日本大震災をめぐる宗教社会学的試論」『宗教と社会』一九・一一五―一二九。
- 橋本裕之二〇一五『震災と芸能―地域再生の原動力』追手門学院大学出版会。
- 星野英紀・弓山達也編二〇一九『東日本大震災後の宗教とコミュニティ』ハーベスト社。
- 三木英二〇一五『宗教と震災―阪神・淡路、東日本のそれから』森話社。
- 三木英編二〇〇一『復興と宗教―震災後の人と社会を癒すもの』東方出版。
- 三木英編二〇二〇『被災記憶と心の復興の宗教社会学―日本と世界の事例に見る』明石書店。